

Ⓑ

4

# 小論文

時間 120分

## 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはならない。
2. この問題冊子は13ページである。印刷不鮮明の箇所などがある場合には、監督者に申し出ること。
3. 解答用紙の指定欄に必ず受験番号を記入すること。
4. 解答はすべて別紙の解答用紙に横書きで記入すること。
5. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
6. 解答用紙は持ち帰らないこと。

<資料>は、田野大輔『ファシズムの教室——なぜ集団は暴走するのか』(大月書店、2020年)の一部である。資料を読んで、下記の設問に答えなさい。

(1) 下線部①「権威に服従する人間の心理」とはどのようなものか。説明しなさい。

(1行20字詰め、10行以内)

(2) 下線部②「民族共同体は、単なる幻想にとどまらない一定の現実性を帯びることになった」とはどのようなことか。説明しなさい。

(1行20字詰め、20行以内)

(3) 下線部③「両者が支え合うこの関係が、最終的には戦争やホロコーストという悲惨な結末を生んだ」とはどのようなことか。資料に示された従来のナチスに対する見方との違いにふれながら、筆者の見解を説明しなさい。

(1行20字詰め、30行以内)

(注意)

解答にあたっては、解答用紙の1マスに1字を使い、句読点、引用符、括弧などはいずれも1字として扱うこと。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。書き出しおよび行を改めたときには、1マス空けること。

## <資料>

田野大輔『ファシズムの教室——なぜ集団は暴走するのか』(大月書店、2020年)

### 1 小さな権力者たちの暴走

ナチス時代のドイツというと、独裁者ヒトラーが絶対的な権力を握り、国民を無理やり従わせていたというイメージで捉えている人が多い。

今でも一般向けの解説などでは、ナチスの暴力が社会を覆い尽くし、人びとの自由な活動を抑圧した体制という見方が提示されることがよくある。ゲシュタポ(秘密国家警察)などの機関が国民の生活をすみずみまで監視し、少しでも反対の姿勢を示す者がいたらすぐに捕まえて強制収容所に放り込んだ暗黒時代。こうした単色のイメージが、ナチスに対する私たちの見方を規定していると言ってよい。

だが意外なことに、この時代を経験した人びとに対する戦後の聞き取り調査では、戦争が始まるまでは「よい時代」だったと回想した人が多かったという。それは取りも直さず、国民の多くがナチスの支配に基本的に同意していたことを意味している。

実際、ナチス政権下では何度か国民投票がおこなわれ、ヒトラーがおこなった様々な政策に対する国民の総意が問われたが、公正な選挙ではないにせよ、90%前後の支持が表明された。当時の世論を監視していた警察当局の報告書も、国民の多くがナチス政権の個々の政策には批判や不満を抱きながらも、ヒトラーの内政・外交上の成果には明確に賛同していたことを確認している。

ナチズムは大衆運動であって、この運動に加わった人たちは多かれ少なかれ積極的にヒトラーを支持していた。近年の研究では、「合意独裁」という見方も提示されている。ヒトラーが独裁的な権力を握っていたことは確かだが、その支配が広範な国民からの積極的な支持によって支えられていたことは見逃せない。

他方、一般大衆がヒトラーに喝采を送った理由を、ナチスの巧妙なプロパガンダ(宣伝)による洗脳に求める人も多い。ヒトラーの巧みな弁舌が多くの人びとを惹きつけ、ラジオや映画を通じて国民全体を熱狂の渦に巻き込んだという見方は、一般的なナチス・イメージの基調をなしている。

だがそのように考えるのも、歴史的な現実を過度に単純化することになろう。そうした見方は現実の一端を突いているとはいえ、ドイツ人が自分の意思をもたずに、あるいは恐怖に怯えながら、ハーメルンの笛吹き男の笛の音に誘われるまま、夢遊病者のごとく従っていたかのような誤った認識をもたらしかねない。

ヒトラーがもつばら暴力や宣伝の力で人びとを家畜のように従わせていたという見方では、ナチス政権下の支配と服従の関係を十分に説明することはできない。ドイツの国民は騙され脅されて動員されたのではなく、多かれ少なかれ自ら積極的に隊列に加わったのだった。

そこで考えるべきは、一見家畜の群れのように独裁者に従っていた人びとが、そこにどんな魅力を感じていたのかということである。彼らを積極的な支持へと走らせたものは、いったい何だったのか。

(中略)

ここで少し、社会心理学的な観点から問題を考えてみよう。参考になるのは、ドイツ映画『e s [エス]』*Das Experiment* (2001年)、スタンフォード監獄実験という心理学の有名な実験を映画化した作品である。

映画ではまず、新聞広告で被験者が15人ほど集められる。被験者は看守役と囚人役に分けられ、大学の構内につくられた模擬監獄で2週間生活することになる。ところが実験が始まると、囚人役に対する看守役の暴力がエスカレートしていく。

映画ではこのように、普通の人間が監獄という状況のなかで凶暴化していく様子がありありと描かれ、最終的に悲惨な結末を迎えることになるのだが、実際の監獄実験はわずか6日で中止された。実験の過程で看守役の虐待が激化し、囚人役のなかに精神に異常をきたす者が出たため、外部の弁護士が介入して実験をやめさせたのである(なお、この実験については近年、被験者への演技指導があったのではないかとの疑義も出されている)。

映画『e s [エス]』には、暴力がエスカレートする最初のきっかけとして、何人かの看守が騒ぎ出した囚人たちを鎮めようと、消火器を噴射するシーンが出てくる。看守らは囚人たちの暴動を鎮圧した後、彼らの服をすべて脱がして裸にし、手錠をかけて監獄の柵にくくりつけた。

このように屈辱を与えた後で、看守たちが控室に戻ってきたときに発した言葉が重要である。ある看守が「少しやりすぎじゃないか」と言ったのに対し、別の看守が「まづかったら上の連中がやめると言うはずだ」と答えるのである。

この言葉に、権威に服従する人間の心理が如実にあらわれている。権威に服従している人は、<sup>①</sup>いわば「道具的状态」に陥っている。自分の意思で行動しているのではなく、上の命令者の意思の道具になっているのである。

この場合、彼らは客観的に見ると従属的な立場にいるのだが、本人の内面では自分が何をしても責任を問われないという、解放感とでも呼ぶべきものが生じている。逆説的なことに、服従によってある種の「自由」が経験されているのである。

監獄実験が明らかにしたのは、権威への服従が人びとを道具的状态に陥れ、無責任な行動に走らせるということである。この実験で看守役の暴力がエスカレートしたのも、権威への服従がもたらした独特の心理状態が原因である。

しかも重要なのは、そうした残虐性が個々人の性格によってではなく、監獄という特殊な状況によって生み出されたものだという点である。看守役と囚人役を監獄のような状況に置くだけで、看守役がどんな人間であろうと残虐な行動に出るようになる。

権威への服従が人びとの責任感を麻痺<sup>まひ</sup>させ、残虐な行動に走らせる。この監獄実験の知見は、普通の市民が一定の条件下では他人に電気ショックを与える残虐な行為に及ぶことを明らかにした、ミルグラム服従実験の結果とも符合する。

ヒトラー政権下のドイツ人の行動にも、同じようなメカニズムを見出すことができる。ナチスがユダヤ人を人種的に差別・迫害したことはよく知られているが、それが激烈な暴力に帰着したのも、権威への服従が人びとの心理に及ぼす独特の影響によるところが大きい。

ユダヤ人への憎悪をかき立てることは、ナチ党のプロパガンダの重点の一つだった。悪名高い反ユダヤ主義的な機関紙『突撃者(デア・シュトゥルマー)』は、ポルノまがいの性的なイメージを用いて「敵」であるユダヤ人への憎悪を絶えず煽<sup>あお</sup>り立てていた。

(中略)

「ドイツの破滅をはかるユダヤ人の巨大な陰謀」に対しては、どんなに過激な暴力も自衛手段として正当化されることになる。このようにしてナチスは多数派の人びとの

被害者意識を刺激し、彼らにユダヤ人への報復行動に出るようそそのかしていたのだった。

ユダヤ人への暴力は、人びとの身近な日常生活に関わる場所でも生じていた。そうした行動の一つとして、いわゆる「人種汚辱」キャンペーンが挙げられる。

これはユダヤ人排斥の一環として、ナチ党が中心になって全国各地で実施したものである。ユダヤ人とドイツ人のカップルを捕まえて公衆の面前で罵倒し、「ドイツ人の神聖な血を汚した忌むべき存在」として晒し者にした。ユダヤ人を夫にもつドイツ人女性や、ユダヤ人と交際中のドイツ人女性などが主に標的にされたようで、男性がユダヤ人で女性がドイツ人というケースが大半を占め、男女が逆のケースは少なかったようである。

(中略)

こうした差別的・排外主義的な運動は、ときに攻撃衝動を抑制する理性の箍<sup>たが</sup>を外して、人びとを野蛮な暴力の行使に駆り立てることがある。1938年11月にドイツ全土で発生した反ユダヤ主義暴動、いわゆる「水晶の夜」のポグロム(集団的迫害)は、加害者たちがある種の解放感から過激な暴力に及んだことを示している。

ユダヤ人への報復行動を呼びかけるゲッベルス宣伝相の演説を引き金に生じたこの暴動では、ナチ党・突撃隊に動員された暴徒の群れが各地のユダヤ人街を襲撃し、ユダヤ教のシナゴーク(会堂)への放火、ユダヤ人の商店や住居の破壊といった狼藉<sup>ろうぜき</sup>行爲をくり広げた。特徴的だったのは、集団的な暴行と略奪である。暴徒たちは押し入った住居や商店でユダヤ人を袋叩きにし、調度品や商品を破壊・略奪するなど、暴虐の限りを尽くした。

権力の後ろ盾のもとでは好き放題に暴れまわっても罰せられないという状況が、多数の人びとを過激な暴力に駆り立てたことは明らかである。彼らは上からの命令を錦の御旗にして、存分に欲求を満たすことのできる「自由」を享受していたと言えるだろう。

権力者の号令のもと「悪辣な敵」に義憤をぶつけるとき、人びとは正義の側に立ちながら、自分の不満や鬱憤を晴らすことができる。そこではどんなに過激な暴力をふるおうと、上からの命令なので行動の責任は問われない。権威の庇護<sup>ひご</sup>のもと万能感にひたりながら、自らの攻撃衝動を発散することが許される。

ナチス時代の社会はこういうメカニズムによって形成され、維持されていた面があった。ヒトラーという権威に従う小さな権力者たちが、多くの同調者や傍観者を巻き込みながら敵や異端者を排除し、つくりあげていく多数派の共同体。それがナチスの言う「民族共同体」である。

## 2 「民族共同体」という理想郷

ナチスは自分たちの社会を「民族共同体(フォルクスゲマインシャフト)」と呼んでいた。これは彼らにとって最も重要な理念で、この民族共同体という一致団結した社会を建設することがヒトラーやナチ党の目標であった。

民族共同体は、内部に対してはすべての成員の結束を、外部に対してはあらゆる敵と異端者の排除を求める社会であり、絶えず敵と味方を区別することで、同質性と凝集性が維持・強化される仕組みになっていた。

ナチスは多くの人びとに「悪辣な敵」への憎悪を抱くよう仕向けることで、彼らを道徳的に「正しい」味方の側に引き込もうとしていたとすることができる。それでは、この「味方」の世界としての民族共同体はどういう社会だったのだろうか。

ナチ党女性団体の機関誌の表紙を見てみよう。中央に兵士が立ち、その両脇にシャベルをもった労働者と、鎌をもった農民が立っている。三人の後ろには、母親と子どもが描かれている。前に立つ三人は、母子を後ろにして外側を向いている。外部の敵と異端者から、自分たちドイツ人の家庭を守っているという構図である。

そして説明文には、「われわれは帝国を担い、建設する。労働者・農民・兵士」と書かれている。職業は違っても、この三者いずれも民族共同体の担い手であり、建設者だということである。

民族共同体という言葉自体がそうだが、ナチスは絶えず身分や階級を超えた結束や連帯を強調していた。何らかの崇高な大義、ここではドイツの平穏な家庭を守るという正義のために、一致団結する社会が理想とされていたのだった。

身分・階級を超えた結束や団結は、ヒトラーの演説でも必ず強調されたポイントである。だがその内容はいつも似たり寄ったりで、基本的に「貧しい人も富める人も、労働者も知識人も、みんな力を合わせて、ドイツのためにがんばろう」ということし

か言っていない。それが民族共同体という言葉の意味するところであって、階級対立の克服という目標がナチスにとっては重要だったのである。

ナチスは様々な取り組みを通じて、民族共同体を一種の「無階級社会」として提示しようとしていた。そうした取り組みの一つに、労働者階級を称揚する宣伝キャンペーンが挙げられる。

それまで肉体労働者は、精神労働者である知識人に比べて蔑視されていたのだが、「これからの社会では、肉体労働者も精神労働者も、ドイツのために働く点では一緒だから、手をたずさえてがんばろう」と肉体労働者を称揚したのである。

これとは逆に、一部の資本家や知識人は、ろくに働きもしないのに贅沢三昧<sup>ぜいたく</sup>でけしからん、不当利得者だとして批判された。ナチ党のプロパガンダが絶えず非難していたのは、「道徳的に墮落した拝金主義者」のユダヤ人だったが、たとえドイツ人であろうと、人から搾取して不当に利益を得ているとらまれた人たちは糾弾された。いずれにせよ、ある種の「公正さ」が要求されていたことは疑いない。

近代芸術への攻撃として悪名高い「退廃芸術展」にしても、「特権」をもつ人びとへの反発を煽動<sup>せんどう</sup>する目的があった。

この展覧会では、表現主義、ダダイズム、新即物主義、キュービズムなど、「退廃」の烙印<sup>らくいん</sup>を押された数多くの作品が晒しものにされたが、庶民には理解できない前衛芸術<sup>ぜんゑい</sup>（注1）への憎悪、そのような「出来損ない」の作品に多額の税金を支出した美術館や公務員への反感を煽る意図があったことは明らかである。

ナチスはいわゆる「健全な民族感情」に訴えて、芸術の評価権を「普通の人間」の手に取り戻すことを要求した。その意味で、彼らの主張は「大衆の正義」を求めるポピュリズム的感情を刺激するものだった。

国民の歓心を買うための取り組みとしてさらに重要だったのは、労働者に対する実利の提供である。

それまで多くの労働者には、旅行に行ったり車を運転したりする機会はほとんどなかった。ナチスは労働者に旅行やスポーツといった余暇活動への参加の機会を与え、ラジオや自動車をはじめとする魅力的な消費財の提供を約束することで、彼らの支持を取り付けることにつとめた。



労働者の余暇を充実させる目的で、「<sup>かん きりきこうだん</sup>歓喜力行団(クラフト・ドゥルヒ・フロイデ)」という名称の組織もつくられた。直訳すると、「喜びを通じて力を得よう」という意味である。

労働者にドイツ各地への団体バス旅行を<sup>あっせん</sup>斡旋したり、大型客船でノルウェーのフィヨルドやポルトガルのマデイラ島を周遊するクルーズ旅行を催したり、バルト海のリューゲン島に2万人もの人びとが利用できるリゾートを建設したりするなど、巨大な旅行代理店のような活動をしていた。

その名称が示す通り、労働者に「喜び」を与えることで、彼らの働く「力」を向上させようとしたのである。利用者にとっては、真面目に働いた者が報われる「公正」な社会の到来と受け取られたに違いない。

ナチスはさらに、国民の消費生活水準を向上させる取り組みにも力を入れた。ドイツを代表する自動車メーカーにフォルクスワーゲンがあるが、カブトムシのような形をした同社の乗用車「ケーファー(ビートル)」はヒトラー政権下で開発された車で、当時は「<sup>かん きりきこうだん</sup>歓喜力行団の車」と呼ばれていた。それまで特権階級しか所有できなかった自動車を、労働者にも手の届くものにしようという<sup>うた</sup>謳い文句で宣伝された。

その後すぐに戦争がはじまったため、ナチス時代には生産されず、約束だけに終わってしまったのだが、工場は完成していたので、戦後まもなく生産が開始された。単一モデルとして世界で最も売れた自動車で、その累計生産台数の記録はギネスブックにも載っている。

ナチスはそれまで特権階級しか得られなかった喜びを労働者にも提供することで、彼らを民族共同体に統合し、平等な社会を実現しようとしていた。社会的に恵まれない労働者の生活水準を向上させようとする取り組みは、「社会主義的」と言えるような性格さえ有していた。そこにはまさに、多くの人びとを体制の受益者・積極的な担い手として取り込もうとする「<sup>あつご</sup>合意独裁」の本質があらわれている。

国民の願望を満たそうとするナチスの取り組みを、単なる嘘にまみれたプロパガンダと見るのは正しくない。そのような見方は、民族共同体の実現に向けた彼らの努力、人びとがそこに見出した真正さを軽視することにつながる。

ドイツの国民は騙され脅されて動員されたのではなく、ヒトラーの訴えに心を動かされたがゆえに従ったのだった。これによって民族共同体は、単なる幻想にとどまらない一定の現実性を帯びることになったのである。<sup>②</sup>

### 3 統合の核としての指導者

それでは、民族共同体と独裁者ヒトラーの関係はどうなっていたのだろうか。これを簡単に説明すると、民族共同体は国民全体が結束して統合された社会であり、その核となるのがヒトラーだということになる。

ヒトラーは混乱を極めたヴァイマル共和国(注2)の議会政治に代えて、強力なリーダーのもと一致団結したドイツ、民族共同体という「理想社会」を実現しようとした。これを説得的に提示するため、ナチ党大会で壮大な式典を演出した。

レニ・リーフェンシュタールという女性監督が撮った記録映画『意志の勝利』*Triumph des Willens*(1935年)は、1934年にニュルンベルクで開催された党大会を撮影したものである。総統ヒトラーに喝采を送る大衆、一糸乱れぬ隊列行進を圧倒的な映像美で描き出して、私たちのナチス・イメージに決定的な影響を与えた。この映画の主役がヒトラーで、彼の登場シーンが大半を占めていることは確かである。実際、映像の多くはヒトラーを下から見上げて撮ることで、彼を偉大な指導者として理想化している。

だがこの映画をよく見ると、ヒトラーが単なる独裁者ではなかったこともわかる。当時の国民世論に関する警察当局の報告書でも、ヒトラーが民衆の間で人気を集めていた事実がたびたび指摘されているが、その最大の理由は彼が庶民の味方で、貧しい労働者の気持ちを理解し、代弁してくれる人物とされていたからである。

実際にヒトラー自身、若い頃は貧しく不安定な生活を送っていた。ほかの政治家と比べると出身階層が低いこともあって、多くの人は彼を庶民の気持ちがわかる政治家だと考えていた。ドイツの首相になってからも、絶えず総統と国民の一体性が強調され、「ヒトラーは民衆から出て、民衆のなかにとどまっている」などという神話が、ゲッベルスによってくり返しけんでん喧伝された。

(中略)

当時ヒトラーを目撃した人びとに、戦後インタビューをしてみた資料集がある。それを読むと、「ヒトラーは偉大で厳しい表情をした、ポスターに描かれているような人物かと思っていたが、実際に見てみたら意外に背が小さくて、愛らしくチャーミングだった」という回想がいくつも出てくる。

こういうギャップが人びとの意識に作用して、ヒトラーは自分たちと同じ心をもつ善良な指導者だ、彼は普通の人間だからこそ一般人の気持ちがわかるという考えにつながっていく。

先に紹介したタバコ・アルバム(注<sup>3</sup>)のなかに、そのような意識を反映した写真が掲載されている。この写真には、「少年が総統に病床の母親の手紙を手渡す」というキャプションが付いている。少年が一人で山荘を訪れて、母親から預かった手紙をヒトラーに渡している。この少年の母親は病気で寝込んでいて、総統への切実な思いを手紙にしたため、それを子どもに託したのだろう。少年が遠路はるばる山荘までやってきて総統に手紙を届け、それを読んだヒトラーは「大変だったな」と、少年の境遇に同情しているように見える。

この写真から読み取れることは、それだけではない。普通に考えると、母親が病気で困っているとしたら、そのときに相談に行く先は地元の病院や役所、せいぜい地域の有力者のところだろう。ところがこの少年は、そこでは埒<sup>らち</sup>があかないから、ヒトラーのもとに直接相談しにきているのである。この少年が実際に地元の関係者に相談したかどうかはわからないが、そういう人たちでは頼りにならないという暗黙の了解があったことが、ここには示されている。

こういうメッセージをナチ党側がどこまで意図して提示したかは不明だが、この写真からは、当時の国民の多くが自分たちと同じ心をもつヒトラーには信頼を寄せる一方、彼以外のナチ党員や役人たちには不信の念を抱いていたことが読み取れる。

ヒトラーはほかの多くの政治家や党員たちとは違って、庶民と変わらない善良で誠実な心をもった指導者だと思われていた。君や僕と同じ普通の人間、誰もが共感を寄せることのできる人物。相手が子どもであろうが政治家であろうが差別せず、率直に願いを伝えればそれを聞き届けてくれるような人物。どんな人にも総統の心に通じる道は開かれていて、官僚機構を飛び越えて彼に直接訴えることができ、そうすればどんな問題もたちどころに解決するというわけである。

こうした夢のようなイメージは、国民が自分たちの願望や期待を投影してつくりあげたものだった。ヒトラーを自分たちと変わらない人間、どんな願いもかなえてくれる存在と見なすことで、人びとはその絶大な権威のもと、自らの利益や欲求の充足を期待していたのである。

#### 4 大量殺戮への道

余暇活動の機会の拡大、魅力的な消費財の普及、そして庶民派の指導者の登場は、国民のあこがれる「公正」な社会が実現しつつあると感じさせるには充分だった。だがこの「公正さ」が、それを脅かす「異分子」の排除によって成り立っていたことを忘れてはならない。

ナチスはヴァイマル共和国の混乱や腐敗を一掃し、ドイツを政治的・人種的な脅威から守ると約束して、ユダヤ人や反対派の人びと、「反社会的分子」などの暴力的な排除を進めた。国民の多くもまた、ナチスの暴力が秩序の回復に役立ち、社会的アウトサイダーの排除に向けられている限りは、これを基本的に容認していた。

こうした国民の基本的同意のもと、民族共同体を脅かす「異分子」への迫害はエスカレートしていく。「水晶の夜」のポグロム以降、ナチスはユダヤ人の国外追放を加速化させ、1939年9月に第二次世界大戦が始まると、やがて組織的な殺戮<sup>きつりく</sup>を実行に移すようになる。

最初に殺害の対象となったのは、「社会のお荷物」とされた障害者である。障害を負ったり難病にかかったりした人のなかには、治らない・治せない人も出てくる。そのとき、こういう人びとを排除すれば「社会の健康」が保てるという優生学的な政策が前面に出てくる。この無慈悲な「理想」を実現するために、医師や官僚の側が積極的に協力した面もあった。この障害者の安楽死作戦(T4作戦)が、その後のユダヤ人の大量殺戮につながっていく。

ドイツ占領下の東欧・ソ連で進められたユダヤ人の虐殺(ホロコースト)も、基本的には官僚による行政的な犯罪であった。アウシュヴィッツ=ビルケナウをはじめ、東欧各地の絶滅収容所で殺害されたユダヤ人の数は数百万人に上るが、この未曾有の規模の大量殺戮には、無数の「机上の殺戮者」たちが関わっていた。彼らはなぜ、そうした残虐な行為に手を染めることができたのだろうか。

この点については、ユダヤ人移送の責任者アドルフ・アイヒマンに「悪の陳腐さ」を見出したハンナ・アーレントの論考が有名である。アーレントによれば、アイヒマンのような加害者たちは決して残虐な殺人鬼ではなく、むしろ自分の出世を願って職務

遂行に尽力する勤勉で忠実な役人にすぎなかった。特定の状況に置かれれば、ごく普通の人びとでも大量殺戮の協力者・実行者になりうるのである。

どんな人でも、何の罪もない相手を殺害するような行為には良心の呵責<sup>かしやく</sup>を覚えるはずだが、ナチスによる虐殺では、虐殺そのものが人種イデオロギーによって正当化されていただけでなく、殺害されるユダヤ人の登録・移送・殺害が分業化・非人格化され、個々の加害者が自分の行為の結果に向き合わずに済むようなシステムが出来上がっていた。無数の加害者たちは犠牲者の顔さえ見ることなしに、遠いどこかでおこなわれている殺戮から目を背けながら、自分に課せられた事務仕事をこなすだけだった。

絶滅収容所へ送るユダヤ人の運命を知りながら、送った後で何が起ころうと自分には関係がないとする彼らの道徳的な無関心さは、権威への服従と組織の分業化・非人格化がもたらす「責任からの解放」の所産だと言える。

アーレントの問題提起を受けておこなわれた監獄実験やミルグラム実験も、権威への服従が人びとを道徳的な拘束から解放し、無責任な行動に走らせやすいことを明らかにしている。上からの命令に従う服従者は、自分の行動に責任を感じなくなり、本来なら良心がとがめるような残虐な行動にも平気になってしまう。

アーレントが言うように、もしも悪が陳腐であるなら、それはどこにでもあらわれる可能性がある。世界中で排外主義やポピュリズムの嵐が吹き荒れている今日、私たちはあらためてその危険性に目を向けるべきだろう。

「ドイツ人はなぜヒトラーに従ったのか」という問題を考察した研究としては、エーリヒ・フロムの『自由からの逃走』 *Escape from Freedom* (1941年)がよく知られている。

フロムの見方によれば、ドイツの人びとはヴァイマル時代の自由が苦しくなって、その重荷から逃れるために独裁のもとに走ったということになる。だがこれまで見てきたように、こうした見方は実態とはかけ離れている。

ナチス支配下のドイツ国民は家畜の群れのように独裁者に従っていたように見えるが、単に受動的に言うことを聞かされていたのではなく、むしろ自分から積極的に欲望の充足を求め、隊列に加わっていったのだった。ラジオやフォルクスワーゲンから

大型客船でのクルーズ旅行まで、様々なご褒美がもらえただけではない。彼らの欲望の追求は、それまで不当にもかなえられなかった当然の要求、民族共同体のメンバーの正当な権利として公的に正当化されていた。

そういう錦の御旗のもとで個々人が私利私欲を追求していった結果、彼らの行動はますます過激なものとなっていく。「水晶の夜」のポグロムも、ユダヤ人への憎しみだけによって生じたわけではない。不当利得者に対する「持たざる者」たちの義憤、それを隠れ蓑にした欲望の追求もまた、狼藉行為を過激化させた原因だったのである。

このように見ると、ナチスは人びとの欲望を抑圧したというよりはむしろ、それを解放した側面のほうが強かったと言える。人びとがヒトラーを積極的に支持したのは、それによって少なくとも意識の上では「自由」を感じることができたからだった。ミルトン・マイヤーの著書のタイトルを借りて言えば、『彼らは自由だと思っていた』*They Thought They Were Free*(1955年)のである。

そういう意味では、支配者と服従者は一種の共犯関係にあった。両者が支え合うこの関係が、最終的には戦争やホロコーストという悲惨な結末を生んだことを、私たちは忘れてはならない。<sup>③</sup>

(注1) 既成の芸術概念や形式を否定し、革新的な表現を目指す芸術の総称。

(注2) 第一次世界大戦後にドイツで成立した連邦制の共和国。1933年にナチス政権の樹立により消滅した。

(注3) 本資料で中略した箇所に必要な記述がある。「ナチス時代、ヒトラーの民衆的な人気を反映して、彼を取り上げたたくさんの写真集が発売されていた。タバコを買うともらえる写真を貼り付けて完成させるアルバムが発売され、その発行部数が30万部以上もあったのである。」

(問題作成の都合上、本文の一部および図版を省略し、一部ルビを加えた。また、注は出題者が付けたものである。)

# 令和4年度入学試験 小論文「出題意図」

## (入試情報公開用)

### 行政政策学類 一般選抜 前期日程

本問題は、田野大輔『ファシズムの教室 ——なぜ集団は暴走するのか』（大月書店、2020年）の一部を資料として用い、受験生の読解や要約の力、論理的思考力や論述力を問うものである。

同書において筆者は、勤務する大学で実施してきた「ファシズムの体験学習」を紹介しながら、ファシズムの仕組みと成り立ちを集団行動の観点から社会学的に解説している。

本資料は、同書第一章「ヒトラーに従った家畜たち」の一部にあたり、ファシズムの仕組みを理解するうえで欠くことのできない、ヒトラー政権下のドイツでのナチズムという歴史的事例をもとに、ファシズムが人びとを巻き込んで暴走していくメカニズムをとりあげている。

設問(1)は、「権威に服従する人間の心理」について、理解できているかを問うものである。

設問(2)は、ナチスが建設しようとした民族共同体について、ナチスはその内部においてどのような取り組みを行うことで、民族共同体が一定の現実性をもつようになったのかについての読解力を問うものである。

設問(3)は、従来のナチスに対する見方との違いをふまえ、支配者と服従者が共犯関係であったことを、欲望の充足、権威への従属の観点から、論述できるかを問うものである。